

青少年地域活動ふるさとを見なおそう 第2集『長門昔ばなし』より

とばやま ふるぎつね

鳥羽山の古狐

むかし長門町ながとまちと丸子町まるこまちの境にある鳥羽山という山にしつぽの先が三十センチメートルほど白い狐きつねが住んでいました。狐は鳥羽山を中心に滝たきの沢さわや仙石原せんごくばらまで行動し、たまたま人を化ばかしてしました。

ある人は滝の沢から佐久さくの親戚に行こうとして、昼食をすまして家を出ましたが、仙石原で化かされ、半日中道に迷って暗くなってからやっと自分の家にたどりつき、その日は親戚に行くことができませんでした。

また旅に出ようとして朝早く家を出たのに、昼さがりの頃、浦山うらやまで「オーイオーイ。」とその人の声がするので、近所の人々がかけつけてみると、自分のゆく道がわからなくて助けを求めたりしています。忘れた頃になると、まただれかが化かされます。ひどいときは、鉄砲を持っている狩人まで化かすこともありました。

「何とか古狐を退治しなきゃあー。」

こんな声が村人から聞かれるようになりました。みんなそれぞれわなを掛けてみたり、毒を油揚げの中に仕込んで仕掛けたりしましたが狐は、しらん顔で振り向いてもみませんでした。

ごうをにやした村人たちは、村中で狐狩りをすることにしました。木蔭こかげや草むらの中にひそんでいる古狐を追いだして鉄砲で仕とめようというのです。

狐を追いつめて仕とめる場所は、広々とした仙石原と決まりました。せこといって狐を追い出す役や、追い出された獲物を待ちかまえていて鉄砲で仕とめるたつのふたてに分かれて狐狩りをはじめました。「こんだっこさ古狐の野郎もおだぶつだわい。」……

みんな意気込んでいますから「ホーイ ホイ ホイ ホイ」と狐を追い出す掛声も一層高くなり、まわりの山々にこだましました。すると草むらの一角がばさばさと揺れて、大きなしっほの先の白い狐が飛び出しました。

「それ出た。」みんなが大声をあげると飛びだした狐は、狐を追いだす役の大勢いるせこの方に向かって、まっしぐらに走り出し、あつという間にせことせこの間を走り抜けて、ゆくえをくらましてしまいました。

全くたちの悪い古狐です。みんな気抜けして、もう手の打ちようがなくなっていました。

それからしばらくたってからのことですが、数十人のわんぱく盛りの子供たちの集団が遊びつかれて仙石原の方から岡森の部落をとおり、家に帰ろうとして滝の沢の部落を通ると家々で飼っている犬が子供に向かって一斉にほえだしました。すると集団の中にいた一人の子供がいま来た道をまっしぐらにかけだしました。みんながあっけにと取られていると犬に追われた子供は四つんばいになって走ったりして山の中に走りこんでしまいました。

それはほんの一瞬のできごとで、子供らは、顔を見合わせていましたが仲間の一人がいなくなっているのに気づいて大さわぎになりました。秋の日は短く日は西の山にとっぷりと沈み、あたりはうす暗くなってきました。

さあたいへんです村の人々はたい松を持ち出し、付近の山々を徹夜で探しましたがそのかいもなく子供の姿はどこにも見当たりません。いちど家にもどって、朝めしをすませて出なおすことにしました。

徹夜の探索ですっかりつかれた一同が朝食を済ませて再び探しに出ようとする、十数キロメートルも離れた隣り村の山中で、子供が見つかったという連絡がきました。

「いったいどうなったずら。」とみんなが心配して、知らせに来た人の話を聞いてみると、子供は疲れているだけで元気だったが、夜露でぬれた着物には白と茶色の狐の毛が一面につき、子供が見つかったあたりの地面には動物の血がてんと落ち、狐の毛がいっぱい抜けて散っていたというお話でした。

こんなさわぎがあったそれ以後は、しっぽの白い狐を見た村人はなく化かされたという人もいなくなりました。